去来抄 上

911.3
キ
上

去来抄叙

芭蕉翁ひとたひ此道に斧をおろして屈曲をうち曲れるを折し俳諧の出ところを伸へてより風は草を抑し均して一派八隅にわたり支流湧かことく終に川水となるかゝれも菜摘女こと耳に好み口に出すの時風調ましえて泥すまくて其意を探らすまに

窮て風體を折き感説十躰して今昔
平地に波瀾を起し其弊を擻ふこそ
いましめ哉去来うの糸なる此抄淵く
漁て呑舟の魚をとらし事あられとや

安永三甲午十月

暁臺

去来抄 上

先師評

外人の評有といへども先師の一言あらば是等ハ此部ニ記せ

蓬莱にきかばや伊勢の初便　芭蕉

深川より此文ニ此句さま〳〵の評あり汝いかゞ聞侍るやとなり
去来曰都ニハ古今の便ともあれ伊勢と侍るハ元日の
式の今めかしからぬを神代をおもひいでて猶より尊と
道祖神のちやや獨中をまはりしなどと蓬莱に侍る
先師返事に汝が聞くまゝにたがはず今日神の加し
くしなるあらんを和して出て慈鎮和尚の詞書より初の

一字を吟じ清浄のうるはしきを筆華に對して結びたる也と

からさきの松ハ花より朧にて　芭蕉

或人曰留りの難あらんやと云其角答曰にてハ哉にかよふゆゑ哉留の發句ににて留の第三を嫌ふぼしといへて句切迫なれバにてと侍るなり呂丸曰にて留の事ハ其角が解あり又是ハ第三の句なりいかにして發句とハなしたまふや去来曰是ハ即興感偶にて發句なる事疑なし第三ハ句案に渡るもし句案につかバ第三等にくだらん先師重て曰其角去来が辯皆理屈なり我ハたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと

行春をあふみの人とおしみける　芭蕉

先師曰尚白が難に近江ハ丹波にも行春ハ行年にもなるべしといへり汝いかゞ聞侍るや去来曰尚白が難あたらず湖水朦朧として春をおしむに便あるべし殊に今日の上に侍ると申先師曰しかり古人も此國に春を愛する事おさおさ都におとらざる去来曰此一言心に徹す行年近江に居たまハゞいかでか此感ましまさん行春丹波にいまさバ本より此情うかぶまじ風光の人を感動せしむる事真なるかなと申先師曰汝ハ去来共に風雅をかたるべきものなりとよろこび給へりし

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

猿蓑撰の時此句書おくり冬の月霜の月置わつらひ侍るよし也衆議冬の月によれり先師曰其角か冬霜に煩ふへき句にもあらすとて冬の月と定め入集させられける初めハ文字つまりて柴戸とよめり然るに出板の後大津より先師の文に柴の戸にあらす此木戸なりかゝる秀逸ハ一句も大切なりたとへ出板におよふともいそき改むへしとなり凡兆曰柴の戸此木戸させる勝劣なし去来曰此月を柴の戸に寄て見れハ尋常の氣色なり是を城門にうつして見れハ其風情あハれに物凄きいふはかりなし実も其角か冬霜にわつらへるもことはりなり

うらやまし思ひきる時猫の恋　越人

先師伊賀より此句於出贈て曰心に俗情あるもの一たひ口に不出といふ事なしかれか風雅是に至りて本情をあらはせりとなり是より先に越人名四方にあまねく人のもてはやす發句多し去れとも爰に至りてはしめて本性を顕すとなり

こからしに二日の月乃吹ちるか　荷兮

凩乃地にも落さぬしくれかな　去来

去来曰二日の月といひ吹ちると働かするあたり予か句ハ

ゆるゝ猶作りと覚ゆ先師曰荷兮が句ハ二日の月と
いふものにて作せり其名目を除けハさせる事なし
汝が句ハ何を以て作したりとも見えず全体の好
句なり但地までとかぎりたる迄の字いやしとて
直し給ひぬ

春風にこかすな雛の駕の衆　荻子

先師此句を評して曰伊賀の作者あはれなる処を作して
有なりしとなり丈草曰伊賀の作者のあはれなる処を先師を
志られ家なれとそのあはれなる処を先師のあはれみ給ふや

清瀧や波に塵なき夏の月　芭蕉

先師難波の病床に予をめして曰頃日園女が方にて白菊の
目に立て見る塵もなしと作す句に似たれハ清瀧の句
を案じかへたり初の草稿野明が方にあるべし取て
破るべしとなり然ども其集にも出侍れハ捨るに
及ばず名人の句に心を用ゐ給ふ事しるべし

涼しさの野山にみつる念仏哉　去来

是ハ吾先寺如来の洛陽真如堂に遷座まし〳〵し時の吟也
此しめの冠ハひいやりと定まり先師曰此句ハ全体
おとなしく作なるものなり五文字しかへてよしとて
風薫ると治め給ふ後猿蓑の撰場にて再治して今の

冠をきせさせ給ける

面梶やあかしのとまり郭公　荷兮

猿蓑撰の時去来曰此句ハ先師の野を横に馬牽むけよ
と同前なり入集すへからす先師曰明石の時鳥といへる
もよし去来曰明石のほとゝきすハしらす一句たゝ馬と
舟とかへ侍るのみ句主の手柄なし先師曰句の働に
おいてハ一歩もすゝみたり明石をとりえたるハいはれなからん
となり終にいりけれ

君か春蚊帳ハ萌黄に極りぬ　越人

先師曰発句ハ落つくへき処の発句にあらされハ越人か発句既落着たり
ともかれハ又極もこそ去来此句蚊帳ハ萌黄に極るまてたれと
月影朝朗なと置て蚊帳の発句となすへしそれをかゝらぬ歳旦
君か代にかけて歳旦となし侍れハ心重く句勢強くなりけれ

振舞や下座になをる去年の雛　去来

此句ハ弄雛ありて後すへ五文字を烏帽子紙衣にハ
いひたるより菓拗下心徹せすおさなしや口なしや猶
類句ハあるましと今の冠を置て窺ひ侍れハ先師曰
五文字に心をとめてねらハ信徳か人の世やなるへし
十分ならすとも振舞にて堪忍有へしと也

田の畦の豆つたひ行螢かな　万乎

此句は先師の斧正ありし凡兆か句なり猿蓑撰の
時凡兆曰此句見所すくなし除へし去来曰風り足を
つけたり蛍の光闇夜乃景気風姿ありといふ凡兆
ゆるさん先師曰兆もし捨ハ我拾ハむ幸伊賀の連中
乃句に是に似たるあり夫を直し此句となさんとて終に
兆か句と成けり

大としをおもへハ年乃敵かな　凡兆

此の文字ゑすゑふと云て予か句也信徳曰ゑさらさと
云へし花を騒人の思ふ事切なり去来曰拙子はお意あり
古人花を愛して明るを待くれを惜み人を恨山を

り迷へともいまた年をおしまれぬに桜と云ハ却而
年のかなしみとぞいへる誹意あさあさしくなりなむ信徳なとか
ころ見えはまて先師に語る先師曰そこらハ信徳か知ところに
あらずとなりそれ後凡兆大年をと冠す先師曰誠此一日
千年のかなしみなりいかにしても売るへきものかと大笑し給ひけり

賓議も開意歎なり花乃咏　去来

先師曰花の咏とは聞なれぬ名なるものかな古人も咏の
花とこそ申侍れ詞を細工してかゝる拙きこと云へからず也

月雪や鉢たゝき名ハ甚之丞　越人

去来曰此は伊丹の句に類ゑ乎ときこえ凡ゝ慊や沐乎等

と云あり越人が句入集いかゞ侍らむ先師曰月雪といへる
あたり一句働見えてしかも風姿ありたゞ惜らくは嫌やと
いひくだせる詞さらに俗なりされども誹諧の俗体をもて
趣向を立俗名をつらね侍る作者の素意なるべし又一躰にて
打もあるべしとなり

きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

去来曰其角は実に作者にて侍るわづかに蚤の喰ひつきたる
事を誰かかくはいひ尽さん先師曰しかりかれは
定家の卿なりさしてもなき事をこと〳〵しくいひつらぬる
侍るときこえし評譯なるべし

をとゝ日はあの山越つ花さかり　去来

是は猿蓑集に二三年前の吟なり先師曰此句いまはやる人な
す一両年を待べしとなり其後杜国が徒とよし野
り御しられける頃より此文字或はよしのを花の山と
いひ或はこれをしら雲とよみて尋常の事となれるを
其角が桜さだめぬといひしに気象をとられて吉野に
発句もなかりきたゞをとゝひはあの山越つと日を吟し
り侍るとなりて後此句をかたる人もうけとりいはず一
両年を待べしとはいかで其知られ給ひけん今は却て愛
おもしろき事ともなり

病鴈の夜さむに落て旅ね哉

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

猿蓑撰の時此うち一句入集すべしと也 凡兆曰病鴈は
さる事なれど小海老に雑るいとゞは句のかけりことあたら
しく誠に秀逸なりといふ 去来曰小海老の句はめづらしと
いへども其物を案じたる時は予が口にもいでん 病鴈は格高く
趣かすかにしていかでか感じ来らんと論じ終に
両句ともに乞て入集す 其後先師曰病鴈を小海老などゝ
同じごとくに論じけりやと笑ひ給ひけり

岩鼻やこゝにもひとり月の客　去来

去来曰洒堂は此句を月の猿とすべしと申侍れど予は客の字勝
りなんと申 先師曰猿とは何事ぞ汝此句をいかにおもひて
作せられや 去来曰明月に山野を吟歩し侍るに岩頭又
一人の騒客を見付たると申 先師曰是にもひとり月の
客と己と名乗出たらんこそいくばくの風流ならめ たゞ
自称の句となすべし 此句は我も珍重して笈の小文に
書入侍るとなん 予が趣向は猶二三等もくだり侍りなん 先師の
意を以て見れば少し狂者の感もあるにや 笈の小文集は
先師自撰の集なり 名を聞ていまだ書を見ず 草稿半
ばにて遷化ましましけるか 昔時申けるは予が發句幾句か

入集なしと聞つる。やゝ歎ず。先師曰、我門人笈の小文に入句三句持たる者は稀なり。汝過分のことをいへりと也。

うづくまる薬の下の寒さ哉　丈艸

先師難波の病床に人々に夜伽の句をすゝめて、今日より我が死後の句なり、一字の相談を加ふべからずと也。さまざまの吟ども多く侍りけれど、たゞ此句丈艸出来たりとのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動き侍らめ。興を催し景をさぐるに、豈いとまあらんやと、此時にて思ひ知り侍る。

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

此句初に冠なく、先師をはじめいろいろと置き侍りて、此冠に極め給ふ。凡兆あとこたへて、いまだ落つかず。先師曰、兆汝手柄に此冠を置くべし。若まさる物あらば我二たび俳諧をいふべからずと也。去来曰、此五文字のよき事は誰々も知り侍れど、是外にあるまじとはいかでか知り侍らん。此事他門の人聞き侍らば、腹いたくいくつも冠置かるべし。其よしと置かるゝ物は又こなたにはをかしかりなん、とおもひ侍る也。

猪の床にいるや明ぬ月　去来

此句を窺ふ時、先師しばらく吟じて兎角のことなし。予思ひ誤りて、先師といへども帰る迄待つ故無しの意を

知のちんやとらくのよしを申侍れハ先師曰さもあれも
しろき不あき古人もよく知侍りて唄ぬとて跡なりより
山に入る志らぬおとハ送る萩の上風とまよめりける和歌
優義のうへにさへ形までかけても化しける哉俳諧自由の
うへにたる曷常の氣を化せんと更に手柄なるべし
一句ハもしろき所ある作を皆案しぬ作と先角に詮なう
あるべしとなり其後おもふに此句ハ郭公なきつるかたと
いへる後徳大寺の歌の同案にていよく手柄なきことを
知れけり

蘿の葉の――――――　何とよみしん作者忘侍り尾張の人の句之

此句も蘿の葉の谷風に一すち峯まで裏吹かへると云句當
よし平先師に此句と語りて先師曰發句ハ物のまく偏く
まくいひはらくに是非ふあらはるなり支考がいへるをきて此ハ
大に感驚しおかて發句といふ物哉知侍るとて此ハ
きぬけ有りし平に今時も當宗にうつしかへれや此す
あとのこもなくうち忘侍るそいとかなる事なれ

下臥につかみわけばやいとさくら

先師路上にて語り給ふ此頃其角が集に此句ありいかに思ひて
か入集しけるとや去来曰いとさくらの十分に咲たる形容
よくいひおほせたるに侍らずや先師曰いひおほせて何かある

予これにいろ〳〵所に結ぶことありしめて発句となるは
つゞまらぬ故ましき事とを知れ侍る

手をはなつ中に落けり朧月　去来

魯町に別るゝ時の句也先師曰此句悪しといふにはあらず
功者にてたゞいひまはされたる也去来曰
いかさま句にさしてなき事を句上にてあやかり侍る所あり
しかれどもいまだ十分に解せず先師の心中に一抱侍れども
句上にあらはれずと見えていかゞ是ハ意到句不到也

泥亀や苗代水の畦つたひ　史邦

猿蓑の撰に予誤て畦つたひと書入たり先師曰畦うつり
と侍れハ形容風流各別なり殊に畦うつりして快活なり
もとより肝要の氣色をあやまりて筆者のことに
あらぬ句となせる事おろそかなる故なりとてきげん
あしかりけり

しだらくに寐れバ涼しき夕かな　宗次

さるみの撰の時宗次一句の入集を願ひて数句吟し侍れど
とるべき句なし一夕先師の傍に侍りけるにいざくつろ
ぎ給へ我も臥しなんとおほせられけれハ御ゆるし候へ
しだらくに居れバ涼しく侍るといへハ先師曰
是こそ発句なれとて今の句に作りて入集せさせ給ひけり

霊棚の奥なつかしや親の顔　去来
はじめハ面影のおぼろにゆかし魂祭といふ句なり
此時添書に祭時も神います如しとハいへども霊棚の奥
なつかしく覚侍るよしを申贈る先師返事に霊祭もの意味
なつかしげにてハ言ひに落て中悪くハ註に霊棚ハ奥
なつかしやと侍るを何とて句になさゞるやと有ところ
し改けり

夕すゞみ疝気おこして帰りけり　去来
予か初学の時発句の仕やう窺ひけるに先師曰発句ハ
句法よし俳意たしかに作すべしとなり試に此句を
賦して窺ふに又是にても大笑し給ひけり

清くゑあふみとも残りけりや麦畠　游刀
凡兆曰是麦畠を麻畠とも成べし去来曰麦麻に
なりてもよもなきなりてもくるしからずと論す先師曰
又ふ侍る物付ぬ物論かましく無用なりと制し
給へり見る人察せよ

いそかしや沖のしくれの真帆片帆　去来
去来曰猿蓑ハ新風の始なり時雨ハ此集の美目なるに
此句仕そこなひ侍るたゞ有明や片帆にうけて一時雨
とあらバいそかしやよりも句ハなりよく人の称も至

よくなりなん去帆もちらしかゝるもありなん先師曰沖の
時雨といふも又一ふしまてよしされど句ハさるかたにおとり
侍るとなり

兄弟のかほ見あはすやほとゝぎす　去来

去来曰此句ハ五月廿八日我兄弟の互ニ顔見合たる也子規なくとも
うち啼るむかし懐しき光源氏の村雨の軒端にたゝずみ給ひしを
紫式部がおもひやりける趣をかりて作す先師曰為家卿のとハ
いかなる一句いまだいはずおほせず亦角ニ評も同前なりと
深川より評し給ふ許六曰此句ハ故作りて細なしと
去来曰公作りて細うしすといへんハさもありなんといへ

おほせぬとも評すへし丈艸曰今猶作意ハさかしく
うけ負りぬれん是おもき合点の内なるへしと大子笑ひけり

手川ら新目にむかふ　横雲

まちかぬる桜より花の咲にけり　去来

先年すり居りと花見の客来あひけりと付侍るの
先師の教つきなかりしさいく又おもとを此句を附
なおす先師曰いかに思ふて附直しけるや予曰初雲の
のどかに機嫌よくりしとみて初ニ附侍れと能かゝるにけ初雲乃
きれいなるけしないふへるなしこれをのぞきてハ詮なかるへしと云ひ
附直し侍るといひ先師曰やはり初の句猶かゝりハ三十棒なるへし

猶浅るなと云すへしとて今此文字にはなりたり

梅にすゝめ枝乃百なり　去来

此句歳旦の眼なり先師深川にて聞て曰此梅ハ二月の
氣色なり去来いかにおもひ誤て歳旦の發句に用ぬ
るとなむ

舩にのりつゝ西國乃馬　彦根の句之

許六ころ此集を撰ける時此句に長をつけたり
先師曰いまた句を手持らしき句をきゝて侍る也そ
手柄なり長あるへからむ上京の時此句何ゆゑに
手帳に侍るや先師曰舩の中にて馬の煩ふいすハいふ
て西國の馬とまてハおくこしらへたる拙なりと申む

弓張乃角さし出ル月乃雲　去来

去来問曰此句も手帳なるにや先師曰く手帳なれと
雲も角も弓張月もいふ事ハ一句きこえぬ

丁稚か擬ふ水こほしたり　凡兆

初ハ嚢なり凡兆曰尿嚢のつよもやへきか先師曰
嬉くなしたれと下韻とふくとも二句に過へつれ一句
なくてもよかつらむ　凡兆水に改む

（古句）ほんとぬけたる池の蓮乃実

咲花にかきおれ極のかふりきて　芭蕉

此前句出る時去来曰かゝる前句をのゝ手へかゝりてハ数刻
案しけれと皆くなし先師に附句を示し給へと
許まて附給へり

くろみて高き樫木乃森

咲花に小き門を出つ入つ　芭蕉

此前句出たる時去来曰前句全体樫木の森の事成
いつまても前文をのミ花を附る事むつかし
と執着しと先師の附句をみて斯附て見せ給ぬ

綾乃寐まきにうつる日の影

なくゝも小き茶鞁めくらす　去来

先師曰よき上﨟の旅なるへしとて平これをきゝて数に
此句を附侍りける好春曰上﨟の旅ときゝて言下に句
出たり蕉門の徒の修練格別也と感す

二つにわれし雲乃秋風　正秀

中連子中きりおとす月影に　去来

正秀亭の會三更なりしゆゑ斜格子新もおりて月陰にて
と付侍るを先師かくまて斧正し給へりとおもひに
曲翠亭に宿す先師曰今夜初て正秀亭に會に
珍客なれハ發句ハ我なるへしと兼て覚悟せつあるを
早上發句と乞ハれ誤く出すつ紀年也

一我のかたへ或人ゝあ侍ゆゝ發句ゝ時をしつさハ今宵
乃舎むなしからむ侍り不興のいかりなれバ我ゝ發句を
出す一しとて手拭を先師の發句なりし正秀忽
脇を賦れバ二つに角とけし雲の氣色なるを
かくおもひやらるれば其三段ある發句のけしきを採りし
未熟のてすなりと申すのかいり侍れバ去来曰此時に
聞新手おもひしたつる山見えてとや一句侍りたれバ
たゞ月の詩文にさやけきいきんとおもひなつりて位を
つきれ侍るとや先師曰此句をきかバいくらかましなん
なるを此發句の秘を一度すまさんと思ふへしとなん

ふおなしに立をしくれ　去来

渋芽生におもしろけつく伏見稲　芭蕉

先師京より難波方への文に此句を書出し此趣の佗者
いまゝ此趣味をとふゐれバきゝもと随分煙をとりゑふ
感てのとゝ仮と也

赤人の名をつかれたり川表　史邦

先師曰中の七文字よくたくみたり發句の長き事くを味
あくあるにれ

駒牽の木曽や出らん三日の月　去来

そやうしらん事月の駒ともいへるを木曽や出らん

三日の月といへる先師曰此句を等閑に令せざる句
なりとおほせあり猶へる

上終

皇學館 短大 圖 第63793號 受入 和 昭36.3.14